特集

知らないと大ケガ！

誰も教えてくれなかった“リアル”英語の丁寧表現

日本語には複雑な敬語や謙譲語があるが、英語には敬語や丁寧表現などなくフランクでストレートな言語だ、と思っている人がけっこう多いと思われます。EEの読者にはそのような方は少ないでしょうが、それでも、英語の命令文や依頼文を状況や相手との立場によって適切に使い分けることができているかというと、心もとない方が多いのではないでしょうか。
日本語の敬語とは異なりますが、英語には英語の社会通念に沿った敬語表現・丁寧表現のおおよその体系があります。今月号ではそれを把握し、相手との関係を言葉の面からもしっかりと構築できるようにしましょう。

執筆

ティモシィ・ミントン（Timothy D. Minton）

慶應義塾大学医学部教授。ロンドン出身。ケンブリッジ大学卒（文学修士）。英語学全般を専門とするが、特に実用英文法と医学英語の著書が多い。主な著書は『日本人の英文法 I・II・III』（研究社）など。日本医学英語教育学会理事。本務の傍ら日英協会専務理事、ケンブリッジ・オックスフォード協会主席幹事、日本英語交流連盟理事なども務める。

翻訳

国井仗司（クニイ・ジョウジ）

翻訳家。東京大学教養学部イギリス科卒。「英語で朗読！」音声配信サイト主宰。

イラスト：Trueffelpix/Shutterstock.com

「英語には丁寧表現がない」という誤解

私が教えている大学のクラスで、新入生に学年最初のレポートの提出を求めたとしましょう。メールによる提出で、期限はたとえば1週間後の4月27日真夜中。——どんな成り行きになるかは、おおむね予想できます。

1. ほとんどの学生は、4月27日の夜遅くか28日未明に提出する。締め切りより数日早く提出する学生が数名、数日遅れて出す学生が数名、そして出さない学生が1、2名いる。
2. レポートはMSワード・ファイルでメールに添付するように、と指示したにもかかわらず、メール本文にレポートを書き込む学生が少なくない。
3. 英文なのに文中に日本語フォントを使っているものや、**英語の文書として書式がでたらめ**なものが多い。
4. 半数以上はカバーレター（cover note または cover letter）を伴っておらず、レポートだけを送ってくる。
5. 数少ないカバーレターの中身を見ると、書いた学生の大半は**丁寧な英語表現の書き方を全く知らない**ことがわかる。

どの国でも、学生はこれに近い行動をとるでしょう（日本語フォントの件を除いて）。おそらく英語圏の国でもそうだと思います。しかし、私が憂慮しているのは、5番目に挙げたポイントです。英語を学ぶ日本人の皆さんが、きわめて重要な問題点を見過ごしているように思えてならないからです。

! 日本語では丁寧な言い方ができるのに……

ほとんどの日本人は礼儀正しく行動しますし、母国語である日本語では必要に応じて丁寧な言葉遣いができます。状況に応じて正しい敬語表現ができないと、一人前の社会人とは認められないのが日本では常識です。ところが、こと英語に関しては「丁寧な言い方なんかどこ吹く風」といった感じに見える人が多いのが不思議でなりません。

「見える」と言ったのには訳があります。たぶん日本人の皆さんは、**丁寧な英語を使っているつもり**なのだと思います。**しかし、結果が丁寧な表現になっていない**ケースが多いのです。肝心なのは意図ではなく、結果（相手がどう受け取るか）です。

こうした食い違いが生じる主な原因は二つあります。一つは、高校の授業で教わった各種英文パターンの日本語訳が（少なくとも丁寧表現のレベルという観点からは）間違っている場合が多いからです。もう一つは、日本語の丁寧な言い方を忠実に英訳しさえすれば、英語でも丁寧表現になるはずだ、という大きな誤解があるからです。

✓ シンプルな命令文でも丁寧な場合がある

さらには、「英語ではそもそも丁寧表現がなく、丁寧な言い方をする必要がないのだ」と思い込んでいる人もいるようです。これは誤解もはなはだしいのですが、たとえば映画やテレビの字幕などを見ていると、丁寧表現に関する間違いが多く、これでは、英語はぶしつけな言語だと思われても仕方ないなと感じます。

たとえば、英語でTake a seat.というフレーズは、文法上は命令文ですが、決して「座れ」と命令しているわけではありません。「お掛けください」と勧めるときに普通に用いられる言い方で、命令文を丁寧表現として用いる正しい用法なのです。しかし、日本語字幕や吹替などでは「座れ」に類した誤訳がまん延しているので、英語は丁寧な言い方に無頓着な言葉なのだ、と思い込んでしまうのも無理はないかもしれません。

さて、レポートのカバーレターに話を戻しましょう。カバーレターを書く学生のほうは、たぶん皆、丁寧な言い方をしようと思っているはずですが、実際には次のような文面が少なくありません。

> Dear Mr. Minton,
>
> Hello.
> I am sending you my assignment.
> Please check it.

たぶん、書いた学生本人は、

> ミントン先生
>
> こんにちは。
> レポートを送ります。
> チェックしてください。

と言いたいのでしょうが、私がこの英文を受け取ったら、後述するように全く別の、ネガティブな印象を抱きます。

書式の重要性

この学生は、ちゃんとカバーレターを書いた少数派の1人ですし、英語で書いたという点も多少はほめるべきかもしれません。しかし、6年間も学校で英語を学んだのであれば、もう少しきちんとした書式で、しかも丁寧な表現ができてしかるべきではないでしょうか。

! 1文ごとに改行してはいけない

まず、1文ごとに改行している点が問題です。日本語では1文ごとに改行しても問題ないのかもしれませんが、英語には基本的な書き方があり、NGなのです。**たとえ文が3つしかなくても、これをパラグラフにまとめるのが英文の正しい書き方**です。

外国語を学ぶ場合には、自国語と大きく異なる部分に最も苦労します。その最たるものの一つが冠詞で、日本人学習者は冠詞の使い方でいろいろ悩みます。ですが、冠詞は「あり、なし」という目に見える相違があるので、日本人も意識して正しい用法を学ぼうとするでしょう。

しかし、日本語と英語の違いの中には、日本人の多くがその存在すら意識していない問題も少なくありません。左ページの第3項で示した書式の件もその一つです。英語では1文ごとに改行するのはタブーとされているのですが、日本人でこれを意識している人はきわめて少ないのです。英語のパラグラフという概念は皆さんも学習しているはずなので、どうして実践しないのか不思議でなりません。自国語の慣習が外国語学習を妨げてしまう一例でしょうか。**見苦しい書式が相手に与える悪印象は、丁寧さを欠いた文章が与える悪印象と同等**と言ってよく、留意したいものです。

敬称の厳格性

さらにこの文には、冒頭から社会通念に反する問題点があります。Dear Mr. Minton, の部分です。英語では、Professorの肩書を持つ人にMr.を使うのは間違いです。たとえていうなら、男性にMs.と呼びかけるようなものです。私の肩書はProfessorですから、当然これを使うべきです（私の銀行口座管理者も主治医も、あるいは英国首相やエリザベス女王でさえ、私への呼びかけにはこれを使うのが本筋です）。

この間違いは、**相手に対する敬称（様、先生、Mr.、Mrs.など）についても、日本語と英語で気配りのポイントが違う**ことを、日本人がほとんど意識していないからです。日本語ではたいていの場合「様」を付ければ無難に済みます。

しかし英語では、相手の名前の前にどの敬称を用いるかを他の人が勝手に判断することはできません。Ms. Smithと呼んでほしいと言っている女性をMrs. Smithと呼んではいけません。相手が博士号（PhDまたはMD）を持っている場合は、Dr. 誰々と呼ぶのが基本です。その人が博士号より高い肩書（Professor、Princessなど）を持っている場合は、それを用います。

相手の正しい敬称がわからない場合も少なくありませんし、名前だけ見ると男性か女性かもわからないことすらあります。しかし、少なくとも公式な場面やビジネスの場では、あらかじめ調べる努力を払うことが大切です（これにはグーグルなどのインターネット検索が結構役立ちます）。

最近ではビジネスパーソンの中にも博士号を持っている人が多いので、そういう人にDr.ではなくMr.やMs.で呼びかけると気を悪くするかもしれません。間違った敬称

英文中に日本語特有の記号を使ってはいけない

「　」や【　】のような日本語特有の記号を、引用符、かっこ、ないし見出しを強調する記号として英文中で使う人をよく見かけます。**英文をタイプするときに日本語特有のフォントを使ってはいけない**、という常識に無頓着な人がほとんどです。英語の先生も「それは間違っているよ」と指摘してくれなかったかもしれませんが、実はこれはとんでもない間違いなのです（ただし＜　＞は数学の不等号としてなら使えます）。パソコンやモバイル端末では、日本語独自のフォントを簡単に英文に混在させることができますが、やってはいけないのです。

こういう間違った思い込みは、ほかにもたくさんあります。たとえば英語の引用符“　”が日本語の「　」と全く同じ使い方をすると考えるのも誤りです。引用符の使い方は英語と日本語で大きく異なっているのです。